

## 他者の苦をわが苦とする精神

刊行のことは

マルクスとは何者であったのか。人類に関してすべてを知ろうとする意志。人類の過去と現在の経験のすべてを、とりわけ苦境の経験がわがことのように知り尽くそうとする精神。何のためにか。人類が完全な自由を手に入れた、生存のすべての苦から解放される道を見いだすために。眼前の社会の学的認識に全力を注ぎつつ『資本論』、全世界の同時代現象のすべてを分析し(時局論文、解放の道筋を模索する(「ゴータ綱領批判」)。国家間戦争や植民地争奪戦の犠牲になる原住民たちの地獄の叫喚に耳を傾け、世界的共同事業として苦境の共同負担を自己の課題とし(『経済学・哲学草稿』)、また民衆のとるべき実践的指針を提示する(『共産党宣言』)。彼にとって、地球の知られざる片隅の苦難は、巨大な国際事件と同等の重要性をもつ。デモクリトスとエピクロスらの自然哲学に強い関心を払う精神は、英国の大工場で搾取される女性と児童の悲惨な人生を克明に描く精神でもある。この世に一人の不幸な人間がいるかぎり、この世界は不正義であるという信念がここに息づいている。

近代世界はマルクスの予想通りに世界資本主義として完成しつつある。十九世紀と同様、国家間戦争は継続し、隠然たる植民地化が地球全体に展開している。個々の現象は変化したが、資本主義の根本傾向は『資本論』が教えた通りに展開している。二十一世紀の現在、社会と歴史の現実を最も深い所で捉える教説、それがマルクスの学問である。

今村仁司

# マルクス・コレクション

全7巻 全篇新訳

監修  
今村仁司  
三島憲一

イデオロギーの呪縛から解放された  
21世紀のマルクス像

その予見どおり、近代世界は世界資本主義として完成しつつある。それは富める者と貧しい者の格差がますます広がってゆく世界である。はたして資本主義は豊かで公正な社会を実現しうるのか。新たな読解をとおして蘇生をまつ魅惑に充ちたマルクスの精髓！

筑摩書房



第1回発売・2冊同時刊行 ◇2005年1月22日

Ⅳ 資本論 第一巻 ① 4-480-40114-8 3360円(税込)  
Ⅴ 資本論 第一巻 ② 4-480-40115-6 3675円(税込)

第2回発売 ◇3月24日 \*以降、隔月刊

Ⅲ ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日  
経済学批判要綱 経済学批判 資本論初版 4-480-40113-X

### このコレクションの特色

マルクスの思想を一望すべく、主要著作をまとまりよく精選。思想形成を跡づけるため編年体を基本に編集。新たな読みの可能性を求めて全篇を新訳。既訳にとらわれない清新かつ平明な訳語・表現を採用。読解の指針となる解説および随所に置かれた訳注。『資本論 第一巻』では、マルクスによる強調を完全復元。



◎造本・体裁 四六判・上製・カバー装  
本文13級一段組・平均四八〇頁  
装幀 中山銀士

ご注文・お問い合わせは、下記の小社サービスセンターへ

筑摩書房 〒331-8507 さいたま市北区榑引町2-604  
電話 048(651)0053

04.11 Akatuki 10

マルクス・コレクション(全7巻)を申し込みます

- お名前
- お申し込み書店
- ご住所・お電話

## 時代を射抜いたマルクスの直感

刊行のことは

『資本論』は一八六七年の刊行だが、マルクスはその後も完成に向かつての仕事が続いていた。涉猟した資料は大変なもので、インドの植民地経営や中国の太平天国の乱なども追っていた。アメリカ資本主義にはことのほか詳しくあった。その彼でも追いきれなかった事態が、しかし彼のテーゼを証明する事態が実は当時進行していた。それは一八七〇年代から二〇世紀初頭にかけて世界中で五千万人が死んだ大飢饉のことである。アメリカの異端の都市社会学者マイク・デーヴィス(『ヴェイクトリア時代後期のホロコースト。エルニーニョ飢饉と第三世界の創出』二〇〇二年)によれば、これは一般にいわれているようにエルニーニョなどの自然災害によるものではなく、なによりもイギリスを中心とする植民地主義の暴力が原因である。植民地官僚によって無理な灌漑事業がはじめられ、それが不作の原因となり、建設事業で国家予算が消耗していたために伝統的な相互扶助も出来なかった。本来なら農家にははずの緊急時の蓄えもロンドンを中心とする国際市場に吸収されてしまっていた。「第三世界の誕生」はここにある、というのだ。ローカルな市場を壊して、当時のグローバル化を推し進めたのは、なにより植民地への近代の侵入という暴力である。原初的資本蓄積は暴力であるというマルクスのテーゼが実は彼の知らないところで展開していたのだ。この暴力はかたちを変えて今も続いている。マルクスの描く資本主義の歴史は、日常の小商品のマーケットで、もうそれとお話にならない。しかし、この暴力と資本の連関の次元で見れば、もつともつと大規模にマルクスが描いた事態が見えにくいところで進行している。現代資本主義の変化を追うときに、マルクスを参照する必要がある理由である。もちろん、それはマルクスの分析装置をそのまま盲目的に使用するこ

三島憲一

# マルクス・コレクション 全巻構成

訳者 今村「司・三島憲一・徳永恂・横張誠・鈴木直・塚原史・中山元・村岡晋一・木前利秋・辰巳伸知・細見和之・麻生博之他

## I

デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異 中山訳

ヘーゲル法哲学批判序説 三島訳

ユダヤ人問題によせて 徳永訳

経済学・哲学草稿 今村・村岡訳

マルクスは学位論文「デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異」でギリシア哲学の終焉の相を論じた。それは同時にヘーゲル以後のドイツ哲学の行方を見定める眼差しへとつながってゆく。生涯の活動の出発点となったマルクス青年時代の諸論者を取りめる。

初期の『経済学・哲学草稿』から『資本論』まで、その著作の副題はつねに「経済学批判」であった。この「批判」のなかにマルクスはどのような意味をこめたのか。

## II

ドイツ・イデオロギー(抄) 今村・三島・鈴木・麻生訳

哲学の貧困 今村・塚原訳

共産党宣言 三島訳

宗教批判におけるヘーゲル左派の観念性を批判した「ドイツ・イデオロギー」、ブルドンのブルジョア性を喝破した「哲学の貧困」、生動する言葉の喚起力によってあまねく世に知られる「共産党宣言」など、三〇歳ごろまでの代表作を集める。

マルクスは、哲学との関係を一新する。哲学が達成した内容を解釈するのではなく、それを現実のなかに持ち込み、現実を変革するなかで哲学を止揚する。哲学の「世界化」であり、世界と万人の「哲学化」である。

## III

ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日 横張訳

経済学批判要綱「序説」「先行する諸形態」 木前訳

経済学批判「序言」 木前訳

資本論 初版「第一章」 今村訳

階級闘争の視点から二月革命の破綻と第二共和政の衰滅の過程をたどった「ブリュメール一八日」、自身の経済学研究の画期となった「経済学批判要綱」、「上台と下部構造」に言及した「経済学批判序言」、そして『資本論』の第一章部分を初版刊行時の形で収録する。

『資本論』のなかで商品や貨幣や資本が乱舞するが、それは経済学ではなく、経済学という名の経済神学の批判である。カント風に見える『資本論』は「経済神学的理性批判」である。それは経済現象の姿をとる宗教「神学的観念の由来を批判することを通して、経済的現実を批判する。『資本論』は人間が経済的魔術から解放される道を教える。

## IV

資本論 第一巻① 今村・三島・鈴木訳

「資本論 第一巻」はマルクスが生前に目をおし刊行を実現した唯一の巻であり、第一巻、第三巻は草稿のまま残され、死後エンゲルスによって世に送り出された。ドイツ版全集を底本とし、旧版を参照しマルクスの意図した強調箇所をすべて復元した。

マルクスの経済学批判は、けっして批判的「経済学」ではない。どのような意味でも経済学ではない。マルクスはエコノミストの経済用語のなかに隠されたキリスト教神学用語を暴き出し、資本「神」の生理学的分析を徹底的に押し進めて、魔術なき世界が可能であることを証明する。

## V

資本論 第一巻② 今村・三島・鈴木訳

「資本論 第一巻」「資本の生産過程」全五章のうち、第二章以下を収録する。ここで展開される再生産論と蓄積論は本篇の白眉であり今日でもその輝きを失わない。巻末に上下巻をおもした解説を付す。

フランスの内乱 辰巳訳

ゴータ綱領批判 細見訳

時局論①(インド・中国論) 村岡・小須田・吉田・瀬島訳

パリ・コミューンという眼前の歴史的事件を活写した「フランスの内乱」、国家社会主義と無政府主義のはざままで共産主義社会を展望する「ゴータ綱領批判」、そしてシャーマナリストとしてのマルクスの発言のうち、インドと中国に関するものをまとめる。

要するに、マルクスの終生の課題であった「経済学批判」とは何であったのか。フョイエルバッハの宗教批判を継承し、経済と政治を貫徹する宗教的「神学的ヴェール」をはぎとり、万人に自己の経済神への服従の現実をつきつけて、自己の現世内存在の真実に目覚めさせ、しかるのちに人間の理性的相互行為が現実的に実現可能であることを教えることにあった。

## VI

時局論② 村岡・小須田・吉田・瀬島訳

芸術・文学論 村岡・小須田・吉田・瀬島訳

書簡 村岡・小須田・吉田・瀬島訳

前巻に引きつづきトルコやアメリカ問題など時局への関心を示す発言のほか、各種論説や書評記事を取りめる。またフョイエルバッハやラサール、ロシア・ナロードニキの運動家ザスーリチ宛書簡草稿にいたるまで、マルクスの息吹を伝える書簡類を幅広く収載する。

### マルクス主要著作年譜



- 1818 誕生
- 1841 デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異
- 1844 ヘーゲル法哲学批判 序説  
ユダヤ人問題によせて  
経済学・哲学草稿
- 1845 † 聖家族
- 1846 ドイツ・イデオロギー
- 1847 哲学の貧困
- 1848 共産党宣言
- 1849 † 賃労働と資本
- 1850 † フランスにおける階級闘争
- 1852 ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日
- 1853 イギリスのインド支配
- 1854 革命のスペイン
- 1858 経済学批判要綱
- 1859 経済学批判
- 1861 北アメリカの内戦
- 1863 † 剰余価値学説史
- 1865 † 賃金・価格・利潤
- 1867 資本論 第一巻
- 1871 フランスの内乱
- 1872 † 資本論 第一巻 フランス語版
- 1875 ゴータ綱領批判
- 1881 ヴェ・イ・ザスーリチへの手紙
- 1883 死去 (64歳)
- 1885 † 資本論 第二巻
- 1894 † 資本論 第三巻

† 印は本コレクションに収録されていないもの